様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｈ０５７８５・１９Ｋ２０９７７

研究課題名（和文）生活科・総合的な学習の時間における子供との関わりに悩む教師への同僚の支援方法解明

研究課題名（英文）Educidation of support methods for colleagues to concerned teachers about their relationship with children related to life environment studies and comprehensive learning time

研究代表者
宮島　新（MIYAJIMA, ARATA）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：００８２４９７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，「『悩める教師』が自ら成長し自信を得るために，同僚の支援はどのような要件を必要とするのか」について，生活科や総合的な学習の時間に焦点を当てた。研究の成果は次の3点である。①子供との関わりに悩む教師の要因として，硬直した教師の授業観や子供観があること。②教師と子供の関係性がよい状況・教師には，子どもの実態に応じて授業構想を再構成する，しなやかな授業観や 子供観があることが確認された。③同僚による効果的な支援の可能性として，その教師の「悩み」を客観的に意味づけ，本人が 「悩んでいること」自体を受け入れられるようにすることや，思考ツールとして「三層のマップ」の活用が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果として，悩める教師の「悩み」は，硬直した授業観や子供観が要因であることが見えてきた。また，その授業観や子供観は，同僚による協働的な省察によって，新たな意味を持ったり，柔軟になったりもする。このことは，教育実践現場についての研究が，「その教師」の「観」と密接であるということであり，今後の同研究分野への一つの視点となり得るものであるととらえた。また，本研究では，教師が自らの授業観や子供観を柔軟にしていく思考ツールとして，「三層のマップ」（宮島2019）の活用に可能性を見出した。このことは，教育理論と実践を往還させる一助となり，具体的な方法として実践現場に取り入れていくことも期待される。

研究成果の概要（英文）：　This study focuses on life environment studies and comprehensive learning time to "know what kind of support colleagues need for the 'concerned teachers' to grow and gain self-confidence." The results of the study are described in three points as below. (1) A teacher's rigid perspective is a significant factor for the teachers concerned about their involvement with children. (2) It was recognized that the teacher restructures lesson plans according to the need of the children, and this flexibility helps in maintaining a good relationship between the teacher and children. (3) The teacher's "concerns" can be objectively defined so that the teacher themselves can accept the "concerns" and utilize the "three-layer map" as a thinking tool; this tool was found as possible effective support from colleagues.

研究分野：教育学

キーワード：教師教育　悩める教師　生活科・総合的な学習の時間　実務家教員　同僚性　三層のマップ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

◆「悩める教師」（教育現場）救済という喫緊の課題

本研究の学術的な「問い」は、「『悩める教師』が自ら成長し自信を得るために、同僚の支援はどのような要件を必要とするのか」ということである。平成 28 年度の文科省の統計データには、病気で離職する教員の 6 割以上が精神疾患とされている。学習指導要領の改訂（文部科学省、2017）や、形式的な働き方改革の波を受け、教員の多忙感は増し、教育現場では悲鳴があがっているのだ。申請者は、研究スタート前年度まで実践現場でこの状況を目の当たりにし、微力ながらも同僚教師の支援を模索してきた。このような教育実践現場の状況に対し、統計的な数値や、事例の報告はなされている。しかし、個々の事例に当事者と共に研究者が入り込んで深く論じているもの（稲垣・牛山、2013、畔上、 2016）は少ない。学校で身悶えしている教師に、同僚として何ができるのか、生態的に寄り添い、生身の現実から抽象的にとらえていく研究は十分になされていないのである。「悩める教師」に対しての支援方法は、「チームとしての学校」（文部科学省、 2015）の名のもとに、現場に委ねられており、言語化されてこなかった。手を差し伸べられずにいる教師は放置され、精神疾患の恐怖に晒されながら離職を考えるのであろう。「悩める教師」への同僚からの有効な支援方法についての解明が急がれている。

◆「悩める教師」の壁となる生活科・総合的な学習の時間

生活科や総合的な学習の時間は、普遍的な教科書を想定していない。その学習内容や学習対象との出会いの多くが子供たちの学校生活にあり、「悩める教師」にとっては、最も自身の悩みが露わになってくる教科である。それ故に「悩める教師」の授業観や子供観を顕著に読み取ることができ、生活科や総合的な学習の時間における子供の主体的な学びの実現と、教師の授業観・子供観の更新は無縁ではない。しかし、現場で実践に追われる教師にとって、そのような自己更新を一人で行うには限界がある。申請者はこれまで実践者として、現場で数多くの生活科・総合的な学習の時間における実践を経験し、また学年主任・研究主任・主幹教諭などの立場から同僚への様々な支援も行ってきた。このような同僚性を維持しつつ、今年度より教職大学院の実務家教員として、研究者の視点から支援について研究を進めていくことができる立場にある。生活科・総合的な学習の時間を「悩める教師」にとっての「壁」から、自己更新の場と変えていくことが期待できる。

◆教師の成長と省察について

教師の成長には、教師自身の授業観・子供観など、教師自身の信念や理念として存在する「観」に着目し、その在り方を追究することの重要性が指摘されている（畔上、2016）。フロム（1977）は、著書『生きるということ』において、教育技術をもつ（to have）様相と、自身の生き方を問うような、在る（to be）様相について述べている。申請者自身の実践経験から、「悩める教師」は、「to have」の様相に身を置いていることが多く見受けられた。この点について、畔上一康は、「教師の成長には、その教師が自身の在り様について、省察を介し目を向けていく」（畔上、 2016）と述べ、省察によって「to be」への視座の転換が起きることを指摘している。また、同分野の先行研究として、「同僚教師との協働省察」（小笠原、 2014）によって、教師の省察の深まり（坂本、 2007）が期待できるとしている。申請者は、教師が自らの授業観を更新していくような省察の深まりを教師にとっての学び（宮島、 2017）ととらえ、自らの更新を願う一人の教師として、そのような学びをいかに支援することができるのかという問いを抱くに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、子供とのかかわりに悩む教師（以下「悩める教師」）が自ら成長し自信を得るための、同僚の支援方法を解明することである。この目的を遂行するため、本研究では「生活科・総合的な学習の時間」を主たる教育実践場面として、次の研究課題に取り組む。①子供との関わりに悩む教師はどのような授業観や子供観をもっているのか。②子供の主体的・対話的で深い学びの姿が観察される時、教師はどのような授業観や子供観で子供と関わっているのか。③子供との関わりに悩む教師に対する同僚の効果的な支援が観察される場面には、どのような要素と条件が見出されるか。これらの研究課題を事例研究法で解明する。

３．研究の方法

（１）事例の蓄積

申請者がこれまで蓄積してきた事例（約 10 の例）を含め、平成 30 年度に同僚として支援した事例（申請時点ですでに支援要請がある「悩める教師」は５名いる）をケースメソッドとして、その教師の授業観・子供観を分類する。（支援活動は必要に応じ随時続ける）

（２）事例の比較

支援による効果が具体的にどのように表れているのか、該当学級に継続的に関わることを通して各事例から効果的であること、効果的でないことについて比較検討する。

（３）事例の統合

効果的な支援が観察される場面には、どのような要素と条件が見出されるか。相談の時期、悩みとなっている状況、実際の授業における子どもの姿や教師の姿に支援内容がどう反映されているのか、支援の実際場面における言説をコーディングの手法で要素化し、その集積データを KJ 法によって分析する。

４．研究成果

本研究は、「『悩める教師』が自ら成長し自信を得るために、同僚の支援はどのような要件を必要とするのか」について、生活科や総合的な学習の時間に焦点を当てた。研究の成果は次の 3 点である。

（１）子供との関わりに悩む教師の要因として、硬直した教師の授業観や子供観があること。

その教師がそれまでに培ってきた授業観や子供観が、固定化されている場合、「今目の前」の子供に対しても、「こうでなければならない」というように、とらえが限定されてしまうことがある。これは、子供の発する言葉や行為の真意とズレた解釈につながり、結果として子供との関係性は悪化していく。しかし、「これまでの自分のやり方を見直したい」と、心機一転、子供のことを丸ごと受け止めようとするだけでも状況はよくならず、今一度「自分が大事にしていたことは何か」と、同僚と共に協働的な省察を進め、硬直していた自身の「観」を自覚することに、更新の第一歩が期待される。

（２）教師と子供の関係性がよい状況・教師には、子どもの実態に応じて授業構想を再構成する、しなやかな授業観や 子供観があること。

一見、授業において子供たちが「バラバラ」に活動しているように見えても、それぞれに学びが深まっている状況を目の当たりにしてきた。このような授業（学級）においては、教師が「どこに居るのか分からない」ほど、子供と一緒になって活動を進めていることも多い。また、話し合いの場面では、「〇〇さんの言いたいことって、こういうことかな？」と、その子供が無自覚であったかもしれないような、真意をとらえて学級全体に位置付けていることもある。

このような状況で、その教師の内側では、目の前の子供に応じて実にしなやかに授業の方向性を再構成している。始めからまったく構想をもっていないわけではなく、むしろ徹底した教材研究や児童理解に基づいた方向性を持っている教師が多い。そこから「大枠」としての、授業の方向性をもち、教師自身の内側で子供の発言を意味づけながら聴いている様子がある。このような教師は、授業の中で子供と共に教材からの発見や、子供の新たな一面の発見に、毎時間自己の更新を感じている様子がある。

（３）同僚による効果的な支援の可能性として、その教師の「悩み」を客観的に意味づけ、本人が 「悩んでいること」自体を受け入れられるようにすることや、思考ツールとして「三層のマップ」（宮島 2019）の活用が見出された。

本研究の成果として、具体的に実践現場に活かしていくことが期待されるのが「三層のマップ」という思考ツールの開発である。悩める教師への同僚支援としては、その「悩み」自体に寄り添うことから始めなければならなかった。しかし、同調し、悩みを共有するだけでは、新たな一歩は生まれず、むしろ職場に負の空気感を生み出してしまう。同僚の悩みを聞きながら、その悩みがもっている意味を、いかに客観視できるのかが、同僚との「対話」では重要であった。悩むことは決してマイナスではなく、子供の新たな一面との出会いや、教師自身の自己更新のチャンスであると認識していくことで、まずは、自分自身を受け入れることができる。また、同僚と共に「悩み」の意味を確かめながら授業づくりを進めることによって、それまでは「悩み」のもとと言えた子供の姿や関係性も、肯定的にとらえることができるようになっていった。

このような同僚との「対話」を生み出すきっかけとして、「三層のマップ」に可能性を見出している。これは、その授業や活動で、「何を願っているのか」という、教材の価値や活動のねらいや真意を「大枠」として吟味し、その一時間の中での子供の発言や行為を同心円のマップに意味づけていくものである。授業づくりとして、事前に作成した「三層のマップ」をもとに、事後の振り返りの場面で同僚と共に、実際の子供の姿を書き足していくことで、互いの授業観や子供観が交流され、悩める教師にとっての自己更新の機会となり得た。この「三層のマップ」の活用については、今後一層の実践研究を重ねていくつもりである。

〈引用文献〉

・エーリッヒ・フロム（1977）『生きるということ』紀伊國屋書店
・坂本篤史（2007）『現職教師は授業経験から如何に学ぶか』教育心理学研究 55 巻
・小笠原忠幸ほか（2014）『同僚教師との協働省察と授業実践の繰り返しが若手教師の授業力量向上に果たす効果』教師学研究 14
・稲垣忠彦・牛山榮世（2013）『続教師教育の創造』評論社
・畔上一康（2016）『〈教師の体９〉概念の解明を通した省察的実践の原理考察に基づく教師の成長モデルの構築』日本教師教育学会
・宮島新（2017）『教師にとっての学びを再考する』信州大学教職大学院 2017 年度報告書
・文部科学省中央教育審議会（2015）「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」、
・文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説総則編
・宮島新（2019）教師の「観」の更新にかかわる同僚支援の可能性―同僚との「対話」がもたらす授業づくりへの影響―信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要「教育実践研究」No.18

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宮島　新	４．巻 13
２．論文標題 野に出る活動で生き生きと学ぶ子ども～「『くさむら』で遊ぼう」の実践から～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 生活科・総合の実践ブックレット	６．最初と最後の頁 24-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮島　新　吉澤裕一　大畑健二　関　浩司　手塚香子	４．巻 18
２．論文標題 教師の「観」にかかわる同僚支援の可能性-同僚との「対話」がもたらす授業づくりへの影響-	５．発行年 2019年
３．雑誌名 信州大学教育学部次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮島　新　小田切　亮	４．巻 55
２．論文標題 生活科学習における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～自らを対象に重ねながら学ぶ子どもと教師の姿から～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本生活科・総合的学習教育学会会報	６．最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 宮島　新　小田切　亮
２．発表標題 生活科（野に出る活動）における子どもの学び・教師の学び
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会第28回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮島　新　畔上一康　吉澤裕一
２．発表標題 教師の『観』の転回を促す省察的実践に関する研究-教師の『観』の自覚化と子どもの学びの深化-
３．学会等名 日本教師教育学会第29回研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考